

福島第一原発の展望台の上で考えた

青木 正美

2018年9月13日木曜日

未明に北海道胆振東部地震が起った2018年9月6日のこと、関西学院大学災害復興制度研究所の「避難・疎開研究会」では、東京電力福島第一原発への視察を行った。早朝に郡山を出発し、富岡町の東京電力の「旧エネルギー館」で現状や廃炉作業の進捗具合のレクチャーを受けた後、スマホやカメラをその場に置いて東京電力のバスに乗り込んだ。

国道6号線を約10kmほど北上し、東京電力福島第一原子力発電所へ到着。早速に入口近くの入退域管理棟で身分証が支給される。まずは大型休憩所という建物へ。この建物の中には食堂やローソン、休憩所などがある。11時30分、2階の食堂で昼食をとる。5つの日替わり定食の中から私はトマトカレーを食べた。ごはんは大盛も普通盛りも一律に380円也。緊張のためか味があまり分からない。厨房の中の様子は分からないが給食の用意は中年の女性が5～6人で丁寧に対応してくれた。この日、女性の職員は食堂でしか見かけなかった。食事の後、紙製のベストを着用し、靴下を履きかえ二重にし、綿のキャップ・ゴーグル・マスク・軍手を着用、最後にヘルメットと下足を履いて約60分の構内視察へと専用バスに乗り込んだ。

まずは免震重要棟へ。バスを降りて中に入る。事故の後に沢山の職員が不眠不休で働いていた、あの免震重要棟である。事故の写真集などで何度も見た入り口の光景がそこにあった。ここであの故吉田所長が命がけで指示を出したのか。免震重要棟を後にし、バスに乗って多核種除去設備（ALPS）の建ち並ぶエリアを通り、展望台でバスを降りた。東電から配布された予定表には「1～4号機原子炉建屋外観 俯瞰」と書かれてある。

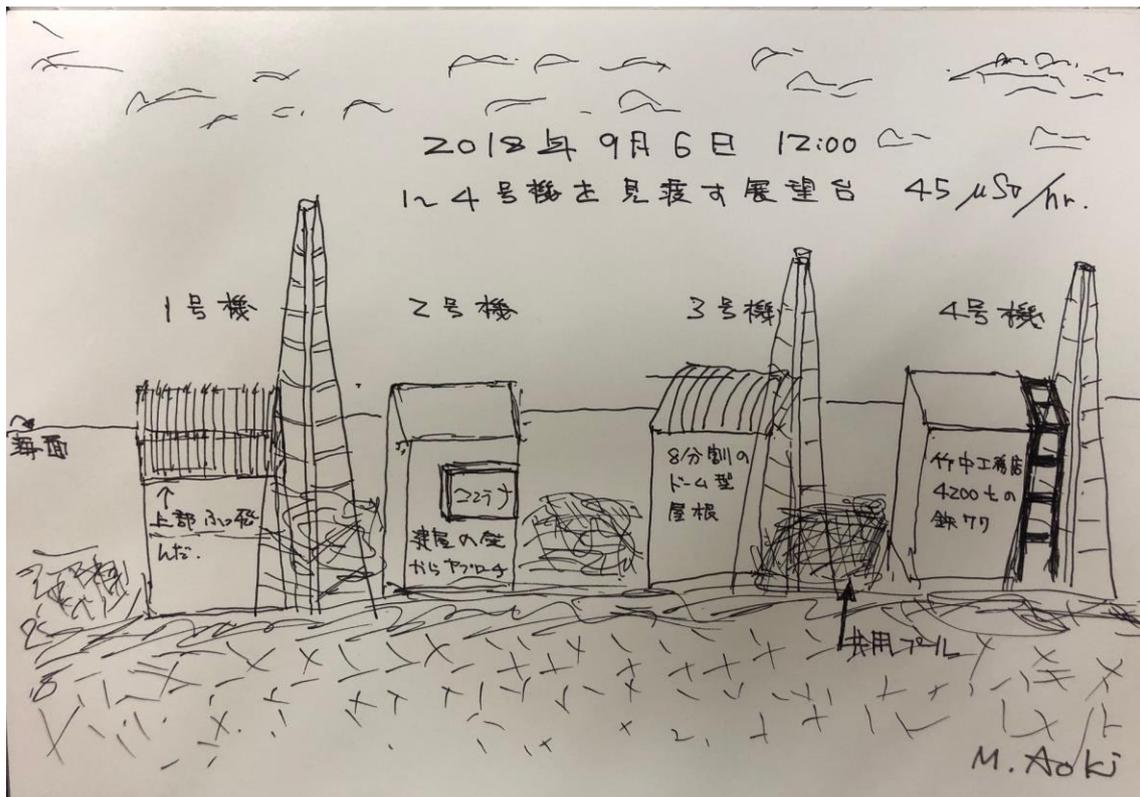
福島第一原発の立地地点は元々、太平洋に面した海拔35mの断崖絶壁の地であったことは、あまり知られていない。原子力施設を作るためには海面から冷却用の海水を引かなくてはならないため、どうしても海拔の低い土地と港湾設備が必要になる。それで35mの断崖絶壁の土地を25mもの切土をして海拔10mにまで掘り下げ、海岸沿いに広大な土地を整地し、そこに第一原発は建てられた。つまり、今も苦しめられている汚染水の元になる地下水は、広大な切土の法面から自然に大量に湧いてきて、それが原子炉建屋に流入した途端に汚染水になるという訳なのだ。

展望台はその元々の海拔35mの土地、つまり切土の始まる突端に作られている。展望台と言っても、簡単に足場を組んで作った場所なのだが、海に向かってそこに立つと、1号機から4号機の4つの原子炉建屋を目前に見渡すことができる。一番近い1号機の建屋までの距離は、概ね20mぐらいだろうか。一番遠い4号機までも100mとは離れていない。展望台から間近かに見える1号機・2号機・3号機・4号機は、みな違う姿をしていた。7年前の3月11日まではブルーの外壁の全く同じ外見をしていたはずなのに。

1号機は建屋の天井が水素爆発で吹っ飛んだまま、上部は鉄の枠組みがむき出しになった姿をしていた。それでも周囲に足場組まれていて小綺麗になっている。2号機は水素爆発を免れたが人が近づけないほど線量が高いので、建屋の外壁を壊すと高線量のホコリが

飛び散る恐れがあると判断し、作業用のコンテナと呼ばれる四角い箱が建屋の横っ腹に取り付けられている。コンテナの中から穴を開けて作業をするそうだ。3号機は核爆発にそっくりな水素爆発というものが起こって、建屋の屋根がふっ飛び鉄骨が飴細工のようにぐちゃぐちゃになったが、それが綺麗に修復されて天辺にはまるでロールケーキのような形をしたドーム型の屋根が取り付けられている。4号機は事故時には点検中で原子炉に燃料棒が入っていなかったにも拘わらず、3号機の爆発の影響で、使用済み燃料プールの下部がふっ飛んで今にもプールが倒壊しそうになったため急遽燃料棒を取り出すべく、ボロボロになった建屋の側面にガッチリと太い鉄骨で建屋を補強しクレーンを増設する工事が行われた。灰色のごっついジャングルジムのような鉄枠が建屋の右側にくっ付いている。

何よりも気になったのが、4つの原子炉建屋周りがみな小綺麗になっていることだ。展望台から見える原子炉建屋の全てに、クレーンが立っていて、丹念に人の手が入って整備がされている。もちろん人が素手で触って掃除をした訳ではないにしろ、高線量の中に身を置いて丹念に作業をした名もない多くの作業員の人々が確かにそこに居たはずではないか。そして今も。水素爆発のあった1号機も、核爆発にそっくりな水素爆発をした3号機も、丁寧に手が入っていて7年半の間休むことなく作業をしている。具体的な廃炉作業の進捗は年月からいって殆どないはずであるが、少なくともその外見は7年半の歩みははっきりと見てとれた。原子炉建屋ばかりではない。海側にある港湾設備に通じる道や、建屋と建屋の間を通る道や共用プールの周囲も整備がされて車輛が通れるようになっている。



その片づけが進んでいる状況を見るにつけ、構内の作業員の健康管理はしっかり保たれているのか、被ばく管理のことが大変気にかかった。私たちが原発に入る2日前に、肺がんで亡くなった原発作業員の労災が認められたというニュースがあったが、その作業員の労災認定は5例目だと報道で知って驚いた。これだけの大事故であるのに労災認定が余りにも少な過ぎやしないだろうか。労災認定に至らない理由は作業員の多次に渡る下請けシステムでのリクルートのせいなのだろうか。

また構内の原発作業員はそのユニフォームの色でそれと分かるヒエラルキーがあるという。東電の社員は濃いブルーのユニフォームなのだが、ユニフォームの色が薄くなるほど下請け度が進むということらしい。ユニフォームの色の薄い作業員の人々も東電本社の人々と同じように、健康管理が行き届いているのだろうか。一時、構内には1日7000人もの作業員が働いていたのだという。現在は1日3000人ほど。ここで命がけで働いていた数え切れない作業員の人たちの健康は、今もしっかり保たれているのだろうか。検診を受け続けているのだろうか。既に現場を去った作業員の追跡調査は為されているのだろうか。

それが気掛かりで仕方がないのは、今もこれまでも、構内の最前線で働く原発作業員の人々の働きがあつてこそ、この国で暮らす私たちの安寧な暮らしが保たれているのではないかと思うからだ。だからこそ下請けの末端の作業員の働く環境が守られてこそ、この国の未来があるのではないかと、心底そう思う。

構内バスで2号機と3号機の間を通った時、「 $235\mu\text{Sv/hr}$ です」という声が出た。その線量の中をバスが走っているという事実。そのバスに自分が乗っているという事実。その事実で圧倒されつつ視察は終了した。この日、私の受けた積算の γ 線被ばく量は2時間弱の滞在で 0.02mSv ($20\mu\text{Sv}$) だった。

第一原発からバスに乗り、富岡町の「旧エネルギー館」に戻ってきて数時間ぶりにスマホを手にした私は、北海道の胆振地方で起こった地震で全道がブラックアウトになっているを知った。Twitterではブラックアウトになった理由として、泊原発が動いていなかったからだというデマが広がっていた。

私はいかなる理由をもって原発を動かすべきではないと断言する。確かにあの展望台から見た原子炉建屋は綺麗になっていた。が、実際に1号機・2号機・3号機の原子炉はメルトダウンして、核燃料は原子炉の鋼鉄の底を溶かし建屋のコンクリート床のペDESTALも溶かして地中に向かってメルトスルーをしてしまったのだ。未だに線量が高過ぎて、作業員もその目で燃料デブリの存在を確認することは出来ていない。どこにどれだけの量のデブリが存在しているのかさえ分かっていないのだ。その正体不明の燃料デブリを1g残らず総て回収するためには、恐らく軽く100年以上はかかるに違いない。第一、1号機から3号機までの燃料プールには使用済み燃料棒が事故当時のまま入っている。これを全て取りだして共用プールに入れ、なおかつ将来的には乾式保管するようドライキャスクへ移行して安定化させなくてはならない。地下水が流れ込まないように凍土壁で遮蔽したが、それでも今だに一日95tの地下水の流入があつて、汚染水は増え続けている。福島第一原発は「アンダーコントロール」などでは決してない。

ひとたび事故が起これば地域住民の尊厳ある暮らしが一瞬にして奪われ、健康被害の大きなリスクも抱えながら何十年も生きてゆくことになる。そんな被害者への補償制度も全く整っておらず歪で不誠実不公平極まりないプアな補償スキームは、この国が21世紀の民

主主義国家であることを忘れさせるような代物だ。当然ながら低線量被ばくに関しては全く意に介さない当局。そうして電力会社には湯水のように国費が投入され、電気料金も上がって私達の負担は一向に減らない。そうして結局は、誰一人として責任を追求されない電力会社と監督官庁。その成れの果てが、地震災害にいつ見舞われるかもしれない地域で、次々に老朽化した原発の再稼動が進む無責任で理不尽な国が、今のニッポンの真の姿なのではないか。

この現状が福島第一原発の事故以来、全くもって何ひとつ変わっていないのではないか。口だけで「アンダーコントロール」というトップ、そのトップを担いでいる政官財マスコミの人々の口車によって大人のフリして、この人類史上最も大きな原発事故に、無関心風を吹かすのは、もうやめようではないか。福島第一原発事故の問題とは、この国の喫緊かつ最重要問題であることを思い出そうではないか。国の一番の問題点を隠して隠して隠し通してきたのが安倍政権の5年半だった。この国は明日にでも次の大きな地震災害が起こるかもしれない、そういう時代を私たちは共に生きているのだ。もう一度、心を合わせてこの国の原発問題について考えてゆこうではないか。福島第一原発の展望台でスケッチを描きながら、そう心に刻んだ2018年9月6日だった。